

## 全国農業協同組合中央会会長賞

## かぞくのチームワーク

大蔵村立大蔵小学校二年

早坂 佑羽

「あした、なえつくり、手つだつてくれ。」

めずらしく、おとうさんが、そう言いました。

ぼくは、すぐに、

「いいよ。」

と答えました。前からおにいちゃんが手つだつてい

た田んぼのしごとをしてみたいと思つていたから

です。いつもは、おとうさんとおかあさんとおにい

ちゃんとばあちゃんがなえつくりをします。でも、

ばあちゃんがつかれていて、一人だとたいへんなの

で、ぼくがばあちゃんのしごとを手つだうのです。

つぎの日、ぼくは、朝早く目がさめました。いよいよ、なえつくりがはじまります。ぼくは、ばあち

ゃんのするのをよく見ていました。ばあちゃんは、はこに紙をしいて、きかいに入れました。きかいの

スイッチをおすと、土がドサッとおちてきました。ぼくも同じようにやりました。じょうずにできました。おとうさんは、ぼくたちがつくったはこの土にたねを入れます。たねが小さくてとりずらくて、たいへんそだなと思いました。おかあさんが、そこはこをトラックまではこびます。何回もはこぶので、たいへんそです。おにいちゃんは、きかいにスコップで土を入れるしごとです。水も入れます。力もちだから、このしごとができるのです。ぼくは、かぞくみんなのチームワークがとてもいいと思いました。いつもぼくがたべているおいしいおこめが、こうやつてできているんだと思うと、お手つだいにも力が入りました。

「ゆうわ、じょうずだな。」

と、おかあさんがほめてくれました。ぼくは、ますますはりきりました。かんたんだけれど、何十回もやつていると、足がいたくなりました。でも、みんなのために、おいしいおこめをつくるために、がんばりました。

これからもお手つだいをして、おいしいおこめがたべたいなと思いました。

## ●山形県知事賞●

## 一つぶの大切さ

米沢市立興譲小学校三年

安部 くるみ

六月の下じゅんに、わたしは、お母さんと『さまきづくりにちょうどせん』という行事にさんかしました。

大きなさまきを作れるとと思うと、エプロンと三角きんをつけた時から、ワクワクしました。

グループに分かれて、みんなでささの葉をクルンとつのようにして、その中にもち米を入れて

いると、講師の秋津さんが

「えー、お米落とさないでー！わたし一生けん命作つたお米なんだよー。一つぶもむだにしてほしくないよー。」

一ブルの上を見ると、パラパラともち米がこぼれを集めはじめました。わたしは、ドキッとしてテ

ていました。わたしとお母さんは、「すみません。」

と、言つて、すぐにもち米をきれいに集めてボルにもどしました。少しだろうと思つていたけど、大きじ二はい分位こぼしていました。わたしは、秋津さんの作ったもち米にあやまる気持ちで、今度はこぼさないようていねいに作りました。

出来上がったさまきは、上和田のささのかおりがして、もちもちとしてとてもおいしかったです。

ささまき作りの帰り道、

「直せつ農家の方の話を聞きながら、調理できただなんて、良いけいけんだつたね。秋津さんのもち米に対する思いもさきにつつめたかなー。」

と、お母さんと二人で話ました。

わたしは、この行事を通して、お米一つぶ一つぶに、真心がこめられている事を知りました。その真心に応えるために、わたしは、お米をとぐ時も、こぼさないようにあつかい、味わっていただいていきます。

●山形県農業協同組合中央会会長賞●

## おこぬづくりをみつめて

三川町立東郷小学校一年

佐藤 花音

わたしのうちちは、のうかでおこめや、やさいをつくっています。このあいだ、

「おつきくなつたら、じじちゃんとぱぱといつしょに、のうかのしごと、わたしがてつだつてあげるからね。」

といいました。そうしたら、じじちゃんが、「かのん、うれしいこというのう。おつきくなるの、たのしみだなあ。」

といつていました。わたしのじじちゃんは、おこめづくりのせんせいだとおもいます。ぱぱは、じじちゃんから、こめづくりをおしえてもらっているせいとです。はるにうえた、なえは、ぐんぐんそだつて、9がつには、おこめにへんしんします。4がつに、わたしはなえはこにつちをつめるてつだいをしてみました。からのはこはもてるけど、きかい

にいれて、つちがはいつたはこはおもくてもません。じじちゃんは、おもたいはこを、なんかいものはこんでいて、よくつかれないなあとおもいました。たねまきをしたら、たねがかぜをひかないようになにあたためてあげて、のどがかわかないようにみずもあげて、まいにちなわしろにいつている、じじちゃんとぱぱはえらいなあとおもいました。5がつにかぞくみんなでするたうえは、わたしのうちのはるのいちだいいべんとです。ことしはじめてたうえきにのせてもらいました。たんぼのなかをはしたたうえきは、すびーどがあつて、かぜがすこしさむかつたです。ぱぱは、せんのないたんぼに、まつすぐなえをうえるのがむずかしいといつていきました。おこめをつくるのは、みんなでちからをあわせないとできないことだなあとおもいました。わたしや、いもうとがたいせつにされているようには、おこめにもたくさんのがいじょうがこめられています。おおきくなつたら、じじちゃんとぱぱがせんせいになつて、わたしにおしえてね。わたしのつくるおこめは、どんなあじかな。

●全国優秀賞・山形県知事賞●

## お米のたき方

米沢市立塩井小学校四年

佐藤 舜太

たり、つぶの大きさがちがつたり、なべのそこには茶色のこげの様な物がありました。すいはん器とちがい、水の量かたいている時間が少しでも変わるだけで、お米の見た目が変わらんだとお父さんから聞きました。

ぼくの家のすいはん器がまだ二年しか使っていないのに、この間、こわれてしまつた。電気屋さんに行つてしゅう理をおねがいしたら、しゅう理代が買つた時の半分くらいになるかもと言われました。しゅうりするのに三週間くらいかかるとも言されました。買いかるし、火はなべの横からぼうぼうと出るし、ごはんがたけるか心配でした。だけど、とてもおいしくたけていました。お姉ちゃんは、アルミカンを半分に切つてごはんをたいたことがあるそうです。ごはんをたく方法はいっぱいあるんだなと思いました。昔の人は毎回火を起こしてすごく手間をかけてごはんをたいていたそうです。今はボタン一つで毎日同じごはんが食べられるのかと思うとすごく進化したのだと思いました。

その日の夜、ふつうにごはんが出てきました。不思議に思い、お母さんに聞いてみると、なべでごはんをたいていたそうです。なべでたいたごはんの味は、いつもと変わらないのですが、日によつてはお米のかたさがちがつ

ぼくのお父さんは、ガスを使つてたいたごはんが一番おいしいと言っています。ぼくはそんなガスでたくさんて見たことも、きいたこともありません。一回食べてみたいですが、

とお父さんがじゅもんのようなことを言つていました。それは、「はじめちよろちよろ中ぱつぱ」「赤子泣いてもフタ取るな」です。このじゅもんの通りにごはんをたくとおいしいごはんになるそうです。ぼくは、お母さんと一緒にべでごはんをたいてみました。そしたらお父さんの言つていることがなんとなくわかりました。フタがずっとカタカタと音を出していました。とてもフタを取りたくなるのですが、お母さんには「まだだ。」と言われました。お母さんに言われた通りたき上がるまで持つてフタを取るとともにおいしそうなおいがしました。真っ白なおいしそうなごはんがたけていました。

ぼくの家のすいはん器はなおりましたが、小学校の給食のごはんは、何でたいているのです。でしょうか今度給食の先生に聞いてみたいであります。

そのごはんは、じょじょに「おかゆ」になつて、そのうちぼくたちがよくたべる「ごはん」になつた。白いごはんやたき込みごはん、おにぎりなど、色々なメニューがぼくたちの前にならんだ。

ぼくたちが大きくなるにつれて、おかまの中のごはんもふえていった。そしてついに、おかまいっぱいのごはんをたくようになつた。

ある日とつぜん、ぼくより年上のすいはんジャーが、動かなくなつた。あまりにもとつせんだつたけど、長い間がんばつてくれたんだと思つた。

弟たちが小さかつたころ、お母さんになにを作つているのかと聞くと、「おもゆ」を作つていると言られた。それは、おいしそうに見えなかつたけど、赤ちゃんが始めて食べる物だというのを後で知つた。

## ●山形県農業協同組合中央会会長賞● お米とぼくたち

南陽市立沖郷小学校四年

千田 悠悟

次の日、前よりも一回り大きなすいはんジャーにかわっていた。ずいぶん大きい物にかわったので、なぜかときくと、これからもつとたくさんごはんをたくようになるから、と言われた。

そして、あたらしいすいはんジャーで、前のりょうをたくと半分のりょうになつた。ぼくたちの成長にあわせてごはんはどこまでふえるんだろう。いつかこのすいはんジャーいっぱいにたく日がくるとはいわれたけど本当にそうなのかと思ってしまう。

でも、ぼくが小さいころよりも、ごはんのたりょうはふえたし、じつかのおばあちゃんからお米をもらう回数もふえている。

いつのまにか、弟たちのごはんちやわんがふえて、ぼくのごはんちやわんはお母さんの物より大きくなつた。もう少しするとお父さんの大きさをこえるのかなあと思う。

ごはんのたきかたや、たくりようや、たく道具は、ぼくたちの成長にあわせてかわっていくんだなと思う。

ぼくもはじめてごはんを食べてから、十年成長してきた。

今のはんじゅうでいっぱいにたくのはなん

ねんごだろう。

いっぱいのごはんをたくようになつたころぼくはなにをしているだろう。そうなつた時もみんなでたのしくごはんがたべたい。



## ●山形県知事賞●

### 僕のパワーの源

米沢市立第二中学校一年

鈴木 雄貴

僕は現在、天童にあるモンティディオ山形ジュニアユース村山というサッカーチームに所属している。

僕は現在、天童にあるモンティディオ山形ジュニアユース村山というサッカーチームに所属している。その練習場には、一時間かけて電車とバスを乗り継いで通っている。その電車の中では、練習に必要なエネルギーを取るために、毎回おにぎりを食べるようになっている。サッカーは、体と体をぶつけあつたり、長い距離を走り続けたり、試合の最後まで集中しなければならないスポーツだ。その為、練習終了後三十分以内のゴールデンタイムには、おにぎり、プロテイン、果物を食べている。なぜならエネルギーの回復と、筋肉疲労の回復のためだ。それを毎回続けていると、効果を自分の身体で感じる事ができるようになってきた。その効果は、試合で最後まで走りきれたり、体が強くなったりしたことだ。僕にとっておにぎり

は、大事なパワーの源だ。  
おにぎりは、母と祖母が作ってくれる。毎回同じおにぎりだと僕があきると思い、毎回違う具を入れてくれるので毎回おいしく食べることができ。その中でも特に、母の作る焼きおにぎりと、祖母の作る炊き込みご飯のおにぎりが好きだ。それに、おにぎりには、母と祖母の愛情があり、おにぎりには、僕には欠かせない物なのだと思う。

以前、サッカーチームで栄養講習会があり、体を大きく、強くするためにはどうすれば良いかという事と、食事基礎知識や重要性について学んだ。そこで米はサッカーをする上で、とても重要な食べ物であることが分かった。米の栄養素は炭水化物と糖質であり、主な働きとしては、エネルギー源や集中力の維持である。そして、運動した後の体はエネルギーが減少し、筋肉が傷ついていたため、栄養補給する事が必要だ。つまり消耗したエネルギーを回復させるには、炭水化物である米を食べることが必要なのだ。この事を学んでからは、ご飯は、ただお腹がすいたから食べるのではなく、体のことを考えながら食べる

ようになつた。今は体を大きくするために、とにかくたくさん食べるようにしている。ご飯について学んだことで、改めてご飯の大切さや食べ方を考えることができたので良かったと思う。

僕の家には、野球部だつた高校三年の兄もいるので、十キロの米を毎週買つているそうだ。ニュースでは、お米を食べない若者が増えていると耳にすることがある。しかし、僕の家は、全く違つていて、むしろ正反対だ。このニュースとは、全く無関係な僕の家。なぜ若者がお米離れしているのか疑問に思つたくらいだつた。

米という字は八十八と書くほど米作りにはたくさんの手間がかかると母から教えてもらつたことがある。実際に調べてみると種まきをする準備作業から始まり、僕が知つていた田うえや稻刈の他にもたくさんの手間がかっている。だから、お米にも料理を作つてくれた人にも感謝して残さず食べなければならぬと思つた。

毎日元気に大好きなサッカーをしていられるのは、母、父、祖母、祖父の支えがあり、パ

ワーの源となるお米があるからだと思う。だから、家族やお米作りに係わるすべての人たちに感謝をしなければならない。おにぎりなどであれば、僕でも作ることができるので、今度は、僕がおにぎりなどを、家族の為に作り、今までの感謝の気持ちをおにぎりの中にギュッと込めておにぎりを作つてみたいと思う。



## ●山形県農業協同組合中央会会長賞●

### 食事に込める笑顔と感謝

山形市立第十中学校三年

伊藤 芽琉

わたしには、後悔していることがある。

それは、わたしが小学四年生の時。わたし、母、妹、曾祖母で昼食を食べに行くことになつた。店でわたしはふくれていた。自分の行きたい店に行けなかつたからだ。料理が運ばれてきてからもずっとふくれていた。一口食べて、美味しかつたけれど意地を張つてほとんど残してしまつたのだ。そんな自分が嫌になつて涙がでそうになつたことを覚えている。せつかく曾祖母が連れて行つてくれたのに。結局、曾祖母とご飯を食べに行つたのはこれが最初で最後になつてしまつた。二年後には亡くなつてしまつたのだ。この後悔を胸にしまつたまま、わたしは曾祖母に別れを告げた。なぜわたくしはもっと楽しく食事をすることができなかつたのだろう。もっと、ふくれている時間を惜しむべきだった。食事の場面で後悔が生まれたのは

これが初めてだつた。いつなにが起ころかわからぬ、毎日があたり前ではないこと、食事でどるコミュニケーションが大切だということをわかっているようでわかつていなかつたと気付いた。もつと一緒にご飯を食べたかった。

「連れてきてくれてありがとう。」

と伝えればよかつた。もう一度、一緒に食事をしたかつた。

しばらくして、わたしと母はあの店に行つた。料理が運ばれてくるのを見ているとあの時のことを思い出して少し切なくなつた。やはり、料理は全て美味しかつた。その中でもわたしが一番気に入つたのは、白粥だつた。白粥は、中国の朝食で食べられるということもあつてごくシンプルな粥だ。ほんのり塩気がついていて、噛めば噛むほどお米の甘みを引き出してくれる。その時、思い出した。曾祖母も白粥を食べていた。曾祖母も同じことを思つていたのだろうか。白粥はわたしにとって、改めてお米の魅力を教えてくれた存在であり、曾祖母を思い出させてくれるとしても大切な存在でもあるのだ。

今、わたしは、家族と食事をする時間をとて も楽しく感じている。理由は二つあると考えら

れる。

一つ目は、自分から積極的に話しかけることを意識し、会話の幅を広げることができたことだ。テレビ番組の話やその日学校であつたことなどを話すと、そこから話が広がって会話が途切れることも少なくなつたと思う。

二つ目は、お母さんが作ってくれるご飯がいつも美味しいのでみんな自然と笑顔になってしまふことだ。みんなが明るい表情になれば、楽しく感じるのはあたりまえだ。

お母さんの料理は、わたしにとつて一番だ。お弁当の時にはチャーハンにしたりチキンライスにしたりとご飯をアレンジしてくれる。手間を加えながらも、お米の良さはそのままいかされている母の料理がわたしは大好きだ。だが、作ってくれている母への感謝、食材への感謝を忘れて時々残してしまうことがある。しかしそのままではいけない。たくさんの人へのたくさんの「感謝」を伝えるためにも好き嫌いをせずに食事をしたいと思う。「命あるものを食べると、自分の中での命が生き続ける」とどこかで聞いたことがある。わたしたち人間は、たくさんの生き物と一緒に、命をもらつて生きているのだと思う。そのことを心

に刻んでおきたい。

わたしたちは毎日あたりまえのようにご飯を食べているけれど実はそれはなにも変えられないくらい幸せなことだと思う。その幸せを次世代へつなげていくにはどうしたらいいのだろう。考えて、迷つて、自分にできることを見つけていきたい。

これからも、感謝を込めて

「いただきます。」

「ごちそうさまでした。」

